九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[044] 史淵表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2339005

出版情報：史淵. 44, 1950-08-15. Faculty of Literature, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

彙報

九州史學會春季學術大會

九州史學會春季學術大會は西日本史學會と共同主催を以つて六月三・四日の兩日に亘り九大文學部に於て開催された。先ず第一日は西日本史學會各支部代表の研究發表、第二日午前は日・東・西各科別研究發表、午後は公開講演が行われ、西日本各地から參集の會員は二百名を越え、終始眞摯な發表、活潑な討論が展開され盛會であつた。公開講演題目並びに研究發表は次の通りである。

公開講演

○古代中國に於ける婚姻の季節について　松本雅明

○日本の莊園制と封建制　竹内理三

各支部代表研究發表

蒙古の旗・盟について　楠本達男（大分）

細川藩林政より見たる庶民の生活　森田誠一（熊本）

中世に於ける知識傳播についての考察　長友榮三郎（宮崎）

武家階層の成立　松岡利雄（山口）

鷹尾文書管見　波多野晥三（福岡）

唐代の假子制について　矢野主税（長崎）

フランス革命に於ける非キリスト教化運動　西海太郎（佐賀）

鹿兒島縣日置郡田布施遺蹟について　河口貞德（鹿兒島）

安國寺遺蹟について　森貞次郎（福岡）

（支部代表研究發表の要旨は「西日本史學」第四號に掲載）

各科別研究發表題目

國史部會

變質期に於ける郡司について　鈴木銳彦

記紀に表われた氏族の系譜　原田敏丸

村の協同慣行（特に公役について）　富樫卯三郎

「法華經の五卷」について　飯田一郎

裝飾古墳稻荷山調査概要　高士與市

豐臣秀吉の精神醫學的研究　玉丸勇

肥後平野の條里制　杉本尙雄

日本古代國家の再檢討　布村一夫

先史時代における貯藏穴について　田頭喬

承久の亂について　飯田久雄

東洋史部會

唐代官吏の俸料と貨課の關係について　松永雅生

遼の四樓について　平島貴義

白居易の佛教信仰について　撫尾正信

北宋前半期の市馬法　古川新平
洛陽伽藍記より見たる北魏佛塔　船木勝馬
中國に於ける所謂典禮問題の解決について　伊東隆夫
租調に見る新唐書の增事について　河原由郎
清朝文字の獄について　水原重光
東周禮樂餘談　高村孝治
（以下時間の都合により未發表）
副都統衙門の組織　江島壽雄
羅末三國の鼎立と大陸との關係　日野開三郎
唐代の計帳について　鈴木俊
西洋史部會
チャーチスト運動の擡頭　堤市三
リンカーンと奴隷解放宣言　森祐三
ドーソンとトインビー　渡邊眞治
ビスマルクの「豪華報告」について　田中友次郎
三部會とカイエルについて　首藤助四郎
エラスムスについて　讃井鐵男

研究發表要旨（到着の分のみ）

國史部會

變質期に於ける郡司について

鈴木銳彦

郡司は時に改變あるも概ね譜第制のもとに繼承されて來た。然し延喜天曆頃より譜第の郡司は次第に姿を消して行つた。又この頃から郡判に現れる職名も大領少領等の外に惣行事、大行事、國司代、國目代その他の新名稱が現れて來た。之は國司の遙任に伴う郡司の在廳官人化と深い關連のある事は既に說かれているが、譜第の郡司の衰亡については未だ充分明らかでない。安藝國高田郡の郡司藤原氏は譜第の郡司として平安後期迄續いたが、保延年間成孝の時に、主稅權助中原師長に所領を讓渡するに至つている。而してその讓狀に「於下司者、以成孝之子孫可令宛行給也」とあつて、中原氏の下司となり、政治の表面より退いてゐる。更に承安四年中原氏が嚴島神社に高田郡を寄進して預所職となつた際も「以成孝子孫補下司職」とある。即ち高田郡の譜第の郡司藤原氏は、新勢力の侵入するに從い、その政治的地位が順次降下して行つているのであるが、譜第の郡司の沒落の一型として考えうるであらう。

記紀に表われた氏族の系譜

原田敏丸

記紀に於ける「何某之祖」という記事の統計に基いて、日本書紀よりも古事記の方が氏族の系譜を示す意識が強く、而もその態度は常に古事記の方がより統一的であり、皇室へより集中的傾向を持つている事を論證した。

村の協同慣行

—特にクヤクについて—

富樫卯三郎

村の協同慣行として今日なおクヤクとよばれる作業が行われているが、熊本縣の宇城地方の例によればカドクヤク、ニンチククヤク、またアテグヤクなどいうのがある。カドは一戸から一人、ニンチクはクヤクにあたる年の者（ヤクナンのもの）は皆出る。アテグヤクはえらばれた者が何人か出る。ニンチクと云えばクヤクにあたる者が皆出るという風であるが、今日舊來の公役が廢止されたようにこのコトバも死語となりかゝつている。たとえば下苦竹村人畜家屋數御改御帳ではニンチクは男女と牛馬をさしている。それが村人寄また人寄という風に用いられ、村人數をいみするようになり、さらに百姓・人をもさして使われるようになつた。カドでは人數の足らないツツミホソなどの大仕事の場合ニンチク—總出ということがかつて公役に行われたその殘像が今日のニンチククヤクであろう。熊本民族民俗學會の〃みんぞく〃第四號所載の拙稿を參照されたい。

豐臣秀吉の精神醫學的研究

王丸　勇

豐臣秀吉の體型は、體質的には細長型であるが、性格的にはこの體型に親和性ある分裂氣質の外、肥滿型に親和性ある循環氣質を多分に交えている。このことは其の母大政所が肥滿型、異父弟秀長が肥滿型循環氣質、異父妹旭姫が肥滿型？　たることにより、母系より循環氣質を受け、實姉の長男秀次が細長型分裂病質、三男秀俊が分裂病質？　の點より、父系より分裂氣質細長性體型を遺傳されたものと考えられる。而して近親に秀次、秀俊の如き病質的性格者の存在、子孫即ち種の保存繼續困難なりし點等、其の端睨すべからざる性行と相俟つて、生物學的構造の不安定性、殊に分裂氣質と循環氣質の如き相反する性格要素の對立（胚種對峙性）は、天賦の才能を多彩たらしめ、且つ之を推進する大きな勢力源をなしたと思われる。

然るに其の中年以降殊に初老期に入つては、後嗣に關する苦惱、身體的衰耗、疾患と共に、性格の調和に破綻を來し、脆線的行爲が多く、其の末期に現われた精神障碍も、死病に基ずく症候性のものばかりでなく、内因性要素による障碍も關係したのでは無いかと疑われる。

肥後平野の條里制について

杉本　尚雄

肥後平野のうちで條里制の存否に關して從來とりあげられている地域は、(イ)　上益城郡木山町南方木山、赤井兩川河谷地域、(ロ)　熊本市南部の平坦地にあたる江津、御幸、田迎などの町村(ハ)　宇土町近傍があり、その他に新しく、(ニ)　上益城郡津森村地方、(ホ)　宇土郡綱田村地方を提唱したい。

(イ)は綿貫勇彦氏「聚落地理學」（昭八）に、用水溝の構造が條里のそれと全く一致しているとの地圖上の見解から精査の要を認められているが、阿蘇文書一一四號（大日本古文書家わけ十三）全二三八號、細川氏北岡文庫藏「清正公事蹟集錄」「治國

勝水」正德年間の著「玄察日記」並びに現地調査の結果、慶長以降の沼地の干拓、濕田の二毛作田化に伴う排水路及び耕地整理の結果今の形態が生成したものであることがわかり、(ロ)(ハ)は加藤清正の治水事業による干拓とその後の二毛作田化のための用排水路の方向であることが明らかである。

(ニ)は阿蘇文書二九號によつて天福二年に、(ホ)は二二〇號によつて文永十一年に、里坪制の存在したことが確かであるが、兩地域とも肥後平野の邊緣部にあたり、(ニ)については現在のところ尙現地での證明が困難であるが、(ホ)は山間の狹隘な谷地に分散的に存在していて注目すべき形式である。

上代の食物貯藏穴に就いて

田頭喬

我が國先史時代の遺蹟調査に際して、時々發見され極めて小形にして、且つ比較的深い竪穴を、上代に於ける食物貯藏の穴として意義付け、その樣相を解明せんとする。その爲に、具體的な對象として、栃木縣槻木澤・佐賀縣千足の繩文式小形竪穴、久ヶ原・唐古・飯塚市鴉三緒・同市立岩のそれを採り上げ、これに發表者の最近調査せる福岡縣京都郡犀川町小學校庭の十八個の竪穴の實體を加え述べ、Anderson の北支仰韶住居址のそれ、Forrer の Alsace の Kellergruben. Hooton の Ohio の Cache-pit 等の研究も合せ考えた。かくて、この種の小型竪穴に通有の特性を究明し、特にその彌生式時代に盛行する事より起る彌生式時代に於ける農業の進展相、及びその一遺蹟に於ける配置樣式や個數から、古史に云う「戶」の形態なり、氏族制發生期の問題を考察した。

承久の乱について

飯田久雄

古代から中世への變革の問題は中世史の分野に於いて現在最も關心を集めている研究テーマである。之に關連して鎌倉政權の性格規定は重要な意味をもつてくるのであるが、その爲には鎌倉政權の政治的、社會的、經濟的構造が徹底的に分析され把握されねばならない。今は承久の亂が古代と中世を劃するモニュメンタルな事件即ち古代克服の最後の段階であつたとする石母田正氏と夫を否定して寧ろ南北朝内亂こそ古代社會と封建社會を區切る重要たそして最後的な革命であつたとする松本新八郎氏の所論について檢討を加え、兩氏が古代貴族社會から中世封建社會への推轉のメルクマールとして何を提示せられているかを明にし、現在迄の承久の亂に關する實證的研究の成果が果してその何れを支持するかということについて論述した。結論としては兩氏の所說共にまだ〳〵多くの精細な實證的研究の裏づけが必要であるように考えられること、自分としては鎌倉政權のもつ封建的性格の未成熟さの追及が今後の課題であると思う。（結論は時間の關係で省略した）

東洋史部會

白居易の佛教信仰について

撫尾正信

隋唐時代に至つて佛教は飛躍的に發展し、諸宗の獨立大成を見たが、かゝる華やかな唐代佛教が一般在俗者の間に如何に理解され信仰されて行つたかといふ事は、從來の佛教史家からあまり顧みられたかつたところである。然し在俗者の佛教信仰形態を把握することは、佛教の社會的發展を考察する上に缺くべからざるものであらう。かゝる觀點から、唐代に於ける在俗者の佛教信仰形態を把握するひとつの手がかりとして白居易のそれをとりあげたわけである。彼の佛教思想については、市村博士が「唐代の三教と白樂天の思想」に於て「樂天の思想は儒教から出發し、道教に立寄り、終に佛教の堂奥に到達した」と論ぜられたが、博士の引用されたのは主として居易の通佛教的な思想と禪的な面であつて、それ以外には殆んど觸れて居られない。然し彼の佛教生活の中には、禪と共に彌陀・彌勒・華嚴の信仰や律に對する關心など複雜な要素が見出され、むしろこの方面に彼の具體的な生きた信仰形態が窺われるのである。

中國に於ける所謂典禮問題の解決について

伊東隆夫

天主教の中國布教史上の大問題であつた所謂典禮問題が、一七四二年のローマ教皇の回勅により、論議を禁止されたのに拘らず、一八四二年南京條約締結後は、この回勅が効力を有しないかの如くに、布教が再開されている。この問題の解決は、一九三九年十二月八日を以てはじめてなされたのである。然らば如何なる時態が、ローマをしてこれが解決を宣言せしめるに至つたかを明かにしなければならないと思う。即ち清末より中華民國時代にかけての、中國に於ける思想上の諸情勢の變化をのべ、以てカトリック教會の布教地の文化に對する態度を明かにしたい。（この發表に手を加えたものを、廣島史學研究會の「史學研究」に寄稿した。詳細は後日、それを參照せられたい）

新唐書の增事について
殊に租稻三斛について

河原由郎

新唐書記載の不備はいろ〳〵と論證されているがこの論證は主として新唐書記事は舊唐書と比して事を增し、造事多しとしている場合が多い。租の場合も然りである。新唐書に「凡授田者丁歲輸粟二斛稻三斛」とあり稻三石の增事即ち造事があるとさる然しこの增事に關し從來の考證によるを暫らくやめ稻三斛の實體を考證する要なきや、結論としては稻產地は、折納の原則により、稻三石を粟二斛の代納として納め租としたとの考え方も

又成立はしないか。

東周禮樂餘談

高村孝治

東周時代において儀禮的な古樂と、娯樂的な調子を帶びた新樂とが對立してきたことは明らかな事實であり、また古樂のみが政治的方面は勿論社會的道德的に重大な効果をもたらすものなりとする儒學者の見解が、結局は樂の形式に把われすぎた論であり、因襲的形式的な復古思想の顯著な現われであり、却つて形式に於ても、技巧に於ても音樂的要素を多分に含んで、人の情に迫り、しかも普遍的な特色をもつて民衆の生活に慰安と休息とを與えた新樂が古樂禮贊者の反駁にも拘らず遂に王侯、貴族の關心をも奪うに至り、兩者の對立は急速に新樂の優勢に歸していつたことなどが認められる。かくの如き事情は吾人の研究において唯音樂史的な興味をよぶばかりでなく、樂なるものが種々の禮と結びついて生活の各方面に深い關係を持つものであることから、當時の政治及び社會の情勢の推移、または人心の動向を端的に視わしめる好個の資料であり、社會史的考察の面からも重要視されるべきである。

西洋史部會

チャーチスト運動の意義と一八三八年の人民憲章成立に就いて

堤市三

「一八三八年から一八四八年の十年間、英國の社會事件で廣汎なるスペースを占有した所のチャーチスト運動は、直接目的を政府改革におき、その究極の目的を社會改造においた所の運動である。」然し論者によつて運動の質的性格に對して見解の相違がある。大別して政治的要素を重んじる者（P.W. Slosson I. West.）と社會改造、經濟階級闘爭とみる者（M. Hovell, F.F. Rosenblatt, M. Beer, G.D.H. Cole, Th. Rothstein）とがある。且亦、コールの樣にチャーチスト運動は、復古的農民的運動の域を脱していないと主張する者がある。この點「チャーチズムとは何か」という問題を明かにする必要があると思う。

チャーチスト運動の組織された主要團體はL・W・M・A（ロンドン勞働者協會とB・P・L・（バーミンガム政治同盟）とがあるが、前者の「日和見的性格」と後者の「中產階級的性格」からして運動の眞の代表者たり得なかつた。だが前者が人民憲章——thestandard of the movemen としての、後者が國民請願——instrument in the warfare としての——を生み出した所に、二つの團體の歷史的貢獻性がみとめられる。從つて一八三八年以降の勞働階級の急速なる階級結束は、勿論時の經濟恐慌の影響もあるが、一つは思想面から考えて、チャーターと國民請願の議會提出の結果であるといつても過言ではないと思う。

リンカンと奴隷解放宣言

森祐三

とゝに述べる事は、一八六一年四月十二日の南北戰爭開始後一年四ケ月餘を經た一八六二年九月二十二日に始めて奴隷解放宣言が發せられた事の遲きを責めて、奴隷問題をはつきりさせず連邦統一を戰爭目的に掲げたにすぎず、單に奴隷制擴張に反對するにすぎなかつたリンカンには事態の十分な洞察に缺けていたとされる菊池謙一氏に對して、成程奴隷の無償即時解放は奴隷制に大打擊を與え、戰爭終結を促進したであろうが、然し當時果してかゝる環境にあつたか否かについて左の如き二三の疑問を提出したものである。第一に暗に奴隷財產を認める憲法に對する困難。第二に北部の輿論は急進的アボリションと奴隷制不擴張論とのいづれに傾いていたか。第三に經濟的緊迫感に於いて北部はパツシヴであり即時解放への戰線統一は未成熟ではなかつたか。最後にリンカンの補償附解放への平和的努力は高く評價されてよいのではないか。

ドーソンとトインビー

渡邊眞治

ヘレニズム乃至キリスト教の歷史觀がギリシヤ思想、印度思想などの歷史觀と異なり創造的作用を以て現實に働きかけるのであるが、同じキリスト教的な歷史觀にしても色々な相異が見られる。そのような相異を追究するため、ドーソン、トインビー、トレールチユ、ニーバー、ベルヂヤエフなどの歷史觀を究明する第一歩として、先ずカトリツク的歷史家、文明批評家ドーソンを促える。ドーソンの立場は三つの角度から概括しうる。第一は「神々の時代」「進歩と宗教」などの初期の作品に窺えるもので宗教的角度からの世界文化史、歷史觀の歷史、考古學的立場からのヨーロッパ前史の研究の立場でトインビーと共通な色彩が濃い。第二は「ヨーロッパの形成」「中世紀のキリスト教」などに見られる中世史家としての立場で研究對象の點から第一の立場に連續し、「新しき中世」の把握の根據となつている。第三は「近代のデイレンマ」「宗教と近代國家」「政治の彼方に」などに見られる現代史の諸問題を探究する立場で、玆では文明批評家の色彩が強い。

ドーソンの業績は以上の三方面に分析しうるが三者は綜合的にカトリツクの信仰で纏められている。彼の思想は歷史主義の問題として扱われるのみでは充分ではない。

ビスマルクの「豪華報告」について

田中友次郎

一八五六年三月三十日クリミヤ戰役の局を結ぶパリ會議が終り、この會議にプロシヤ全權大使として出席した首相兼外相マントイフェルは、ベルリン歸還の途四月二十及二十一の兩日フランクフルトに滯在した。ビスマルクは當時ドイツ連邦議會の所在地たるこの市にプロシヤ使節の任にあたつたが、之から五日の後即ち四月二十六日ベルリンのマントイフェル宛、私信の形を以て改めて歐洲の政治情勢に關する詳細を極めた書簡を認めている。この書簡が「豪華報告」(der Prachtbericht) の名

で知られているもので、その名の示す如く形式に於ても内容に於ても恐らくは、數百通に上るビスマルク書簡中第一等を占むる豪華なものである。之はビスマルク全集やポーシンガー編「ビスマルクの外交通信」更にコールの「ビスマルク年鑑」などに見えて居り、和譯にしても一萬語以上に上る長文のものである。

彼はこの中で、透徹せる政治眼と宏壯雄大なる筆致とを以てクリミヤ戰役直後の歐洲情勢を分析すると共に當時のプロシヤの國際的地位に關する論評を行つている。中でも將來のドイツ史と歐洲の國際關係とに照し最も注目すべきは、次の二點即ち普墺戰役の不可避性に關する明確なる斷定と佛同盟成立の自然性と重大性とに關する示唆多き論證とである。

三部會とカイエルについて

首藤助四郎

フランス大革命の直接の發端をなした三身分會議（エタツ・ゼネロウ）（Etats Généraut）の選擧が、どのように行われたか（選擧區、選擧資格、選擧體制）その選擧を通じてカイエ（Cahiers）が、どのような手順、雰圍氣の下で、どのような人々によつて起草されていつたかを明かにすると共に、それらと革命の關係を考察しようとするものである。特に注意すべきは、この選擧を通じて見られたペイ・デター（Pays d'etats）の動向である。プルターニュ州では州會において代議士を選ぶべきであるとの僧侶・貴族の二身分と、王の出した選擧規則に從うべきであるとの第三身分との間に激しい抗爭が生じた。ドーフィネ州會は、三身分會議において三身分合同、頭數制による決議がなされるまでは代議士はどんな決議にも參加してはならぬと指令した。こゝには既に一七八九年五月に大きな紛爭となつた問題が問題とされた。革命は三身分會議の選擧と共に始つたと結論する所以である。

史學懇話會

○第二十五回（六月二十七日）

今回は新しく當大學教養部の西洋史學に鳥取大學より服部哲郎氏、地理學に名古屋大學より三上正利氏の二先生を迎えたので兩先生の歡迎會を行つた。自己紹介の後兩先生を中心に歡談に時を過した。出席者二十七名。

西洋史學科の動向

○西洋史研究會　五月二十五日（木）李尾昭忠

（題目）ボーニング「若きチャールズ・A・ピーアドの政治哲學」に就いて

（出典）The Political Philosophy of Young Charles A. Beard. by Bernard C. Borning. (The American Political Science Review, Vol. XLIII, Dec. 1949, No. 6.

標題に云う "young" とは、ビーアドが當時の史學會に大波瀾を起させた問題の著「合衆國憲法の經濟的解釋」(An Economic Interpretation of the Constitution of the United States) が出版された一九一三年までを指し、當時彼は三十九才であつた。從つて著者は二十一才(一八九五年)以降十七年間のビーアドの生活體驗、その環境、與えられた思想的心理的影響を年代順に述べ、且つ彼の「政治哲學」を解明し最後に「マルクス的思惟」の問題に觸れている。即ち、デ・ボー大學に入學した當時、極めて進歩的といわれたJ.R Weaver に魅せられ、革新主義の擡頭に強い刺戟を受けたことや、また滯英中オックスフォードに學んで、勞働問題を研究したことなどが具體的に説明されており、更にまた、歴史を生長伸展と衰退收縮の兩因を含む絶え間ない變化の一過程をみた二十七才の著作 Industrial Revolution—1901 から、マルクス主義ドグマは容認しないが、マルクス的歴史觀(唯物史觀)は強くこれを支持した青年ビーアドを考察せるこの論文は、甚だ興味ぶかい。

○西洋史研究會　六月十五日(木)宮野啓二

(題目)　ウイリアムス「政治的輿論におけるルソーの影響」

(出典)　The Influence of Rousseau on Political Opinion, by David Williams (English Historical Review, 193)

どく大ざつぱに瞥見すれば、一八世紀フランスに三つの輿論の潮流があつた。第一の流れは Boulainvilliers の著作に表われている君主政治に對する封建的反抗である。第二は Abbé Dubos の彼に對する反對論で、君主制を最上の統治方法として擁護したものである。第三の流れがこゝに述べられている Rousseau の思想である。ルソーは所謂 "philosophes" と違つて、サロン生活やプチ・ブルに對して性格的な反撥心をもち、一貫して「民衆の人」として生き續けた人である。この點 philosophes の代表者たる Voltaire と對照的であり且つ互に敵視しあつた原因でもあつた。こゝで David 氏はフランス革命前後に書かれた無數パンフレットを例證し乍らルソーの影響を辿つてゆくのである。ルソーの著作中最もよく讀まれ且つ感銘を與えたものは「民約論」ではなく「新エロイーズ」や「エミール」であつた。この點について氏の「ルソーは疑いもなくデモクラティックな思想の全般的な醗酵に多大の貢獻をなした。しかしそれは强烈で破壞的ではあつたが、現在の政治制度に對する批判と云うよりはむしろ漠然とした人道主義的影響であつた」と云うルソーの一般的影響の素描にも窺うことが出來よう。かくして氏はアメリカ革命及憲法についてのルソーの影響を檢討し、從來考えられていたようにルソーの影響がそれほど大ではないと述べている。次いでフランス革命について、實に小うるさい程樣々なパンフレットを渉獵し、結論として、革命の第二段階におけるルソーの影響を强調し「それの理論家がルソーであり、そのリーダーが Robespierre である」と述べている。

氏の方法は煩雜な位樣々のパンフレツトを引用して實に實證的科學的（？）ではあるが、論旨がやゝ不明瞭で、ともすれば氏の見解を見失い勝ちになることは、氏の弱點であると共に强味（！）であるかもしれない。

東洋史研究會

第七回例會　（昭和廿五年六月廿四日）

「考古學上より見たる漢代人の生活」　岡崎敬氏

日本の敗戰によつてアジア大陸の考古學研究の第一次の仕事である調査發掘が不可能になつた今日、今迄數十年間の先人の調査發掘の成果を縱横に驅使して、種々の文獻と比較對稱しながら當時の人間の生活を描き出さんとする氏の研究の一端として、先づ漢代のかまどについて研究成果を發表された。（要旨は別項）

第八回例會（昭和廿五年七月廿二日）

「宋雲・惠生の西方求法の年代について」　船木勝馬氏

北魏の東西交通の根本問題としての宋雲・惠生の西方求法の年代を種々の方面から考證して、神龜元年出發・正光二年歸還說を取らる（「西日本史學」第四號掲載豫定）

考古學上より見たる漢代人の生活

——その復原方法の問題——

岡崎敬

考古學のとりあつかう對象が遺物遺蹟といふ人間生活の諸所面であり、ことに日常生活に密接な素材が多きをしめていることはいうまでもないところである。東亞考古學における日本學界の業績の中で南滿洲及び朝鮮の漢墓の發掘はもつともはなばなしいものゝ一つであるが、漢代はすでに文獻のある程度整備せられた時代であり、これらの遺蹟遺物を歷史上より理解するのみならず、考古學的操作の後に文獻をよみとつていかねばならぬ。こゝでは明器として盛んに出土する「瓦竈」をとりあげたわけであるが、これら副葬の樣式は中原に於いて行はれ、後漢書に示す帝陵の制にも見えるものである。現在の遺物からみると、それは「竈」、「釜」、「甑」の三つの部分にわかれる。竈の形式は各地域に小異があるがこの三つの組合せは基本的なものであつて、穀物が蒸されるためのものに外ならぬ。これらは史記、漢書、後漢書には「釜甑」としてよばれるものであり、一般民衆の間にあつては少くも秦漢の交は甑は土製品（土器）である。唐代の明器瓦竈になると釜甑の組み合せがやぶれて鍋の類が多いようであるが、これは穀類をむす形式よりたく形式になつたことを示すものであらう。これらの背景には主要炊器鑄造化・土器の性質の限定とを考慮する必要がある。かゝる考古學的資料を生活の歷史として把握していくことをこの際改めて考えて見たい。

國史科の動向

新刊

森克巳教授は、先に國立書院より學位論文「日宋貿易の研究」を出され、學界に益するところ大であつたが、更に刀江書院より、「日宋文化交流の諸問題」を刊行された。

竹内理三教授は「寧樂遺文」に續いて「平安遺文」卷一、二を刊行され、この時代の研究に新分野を開いておられるが、出版事情により、当分續刊の見込がない爲、史料内容を一々掲示した「平安遺文目錄古文書編一」を出されたが、學界の好評を得て、たちまち品切となり希望者の一部分にしかわたらなかつた。更に續いて、記錄編、文學編にも及ぶ豫定であるが、本文刊行の一日も早く實現する事が期待されており、この結果により學界は飛躍的進展をとげるであらう。

寧樂遺文講讀

竹内教授御指導の下に昨年度に引續いて、研究生が中心に寧樂遺文の研究を續けており「四度公文枝文」迄終つた。

特別研究生

第二期生として

「近世九州地方林制史」　三木俊秋

第一期生として

「律令社會の變遷」　鈴木銳彦

の二君を研究室に迎えた。

九州史學會本年度委員

顧問　長壽吉

委員長　重松俊章

副委員長　竹内理三

同　鈴木俊

集會幹事　小林榮三郎

同　日野開三郎

同　檜垣元吉

同　江島壽雄

同　服部哲郎

委員　渡邊正氣

同　松垣裕

同　船木勝馬

同　森祐三

同　宮野啓二

同　山下孝二

編輯幹事　森克巳

常任委員　西尾陽太郎

同　今來陸郎

同　三上正利

委員　安藤精一

同　三木俊秋

同　平島貴義

同　鈴木銳彦

同　菊池英夫

同　奈賀博史

同　杉谷昭久

同　牧

書記